

第4回東区まちづくりフォーラム

●第1部 基調講演

「商店街の可能性とまちの活性化」

八鍬幸信さん(札幌大学教授)

●第2部 パネルディスカッション

「商店街の未来像とまちづくりへの展開」

コーディネーター

八鍬幸信さん

パネリスト

- 大坂 秀樹さん(環状通東商工振興会会長)
- 五十嵐 利幸さん(札幌商店街振興組合副理事長)
- 位田 美沙子さん(北栄連合町内会女性部長)
- 安田 勝昭さん(経済産業省北海道経済産業局地域振興グループ商業振興室長)

商店街の力をまちづくりの力に

十一月二十七日、「商店街の力をまちづくりの力に」をテーマに、東区民センターで第四回東区まちづくりフォーラムを開催しました。会場には八十人の方々が集まり、熱心に聞き入りました。フォーラムの一部をご紹介します。

基調講演

●バブル経済が崩壊した後、商店街から活力が失われた。売上高の減少、空き店舗の増加や後継者難に見舞われている。今までの商店街振興策は行政や学識経験者といった専門家が主導してきた。その結果、どの商店街でも似たようなアーケード、街灯などが設置され、街並みは画一化した。

●商店街を核としたまちづくりを進めるには、商店街の人たちが、従来の発想にとらわれず、知恵やアイデアを出し合うことが不可欠。商店街と地域の人たちが連携してまちづくりを進めるために、ITを活用するのも一つの方法である。



「まちづくりに住民の知恵」と講演した八鍬幸信さん

●パネルディスカッション

- 商店街と大型店 ○商店街は、大型店には見られない細かい細かいサービスを伸ばす。
 - 商店街と大型店はそれぞれの持ち味を発揮して共存を図る。
 - まちの特性を生かす ○商店街は、地域の特色に根差した行事を実施し、独自色を打ち出してまちの発展を図るべきである。
 - 地域が今までに積み重ねてきた歴史や、住民が協力して育ててきた祭りを資源として活用する。
- フォーラムの概要は報告書にまとめ、ご希望の方に配布する予定です。配布時期は広報さつぽろ東区版でお知らせします。

ひがすとりー

第22回

村は家畜とともに

牛と歩む日々(一)

本格化する乳牛の飼育

食卓に上ることの多い牛乳。牛乳はチーズ、バター、アイスクリームなどの原料でもあり、洋食にもよく使われます。札幌市民に親しみ深い牛乳をめぐる歴史のドラマを振り返ります。

明治十九(一八八六)年、政府は北海道庁を設置。北海道庁は開拓を進めるために本州から資本を導入する方針を立てます。新しい産業発展策によって、札幌は活気づきました。

そんな中、乳牛を飼育して、牛乳販売を始める人たちが札幌に現れます。また、近郊にも民営の牧場が相次いでできました。その代表格は、明治二十四(一八九一)年に宇都宮仙太郎が北一条西一五丁目を開いた牧場です。宇都宮も自ら牛乳を搾り、缶を背負って配達販売しました。

旧加賀藩主で侯爵の前田利嗣が始めた前田農場も有名でした。前田侯は、先に堀基が花畔、篠路にかけて開いていた農場を明治二十七(一八九四)年に譲り受けて前田農場を創設し、翌年には軽



牛がいるのどかな風景(サッポロさとらんど)

同じころ旧札幌村(元村)の藤田文平をはじめ、苗穂村でも乳牛を飼育し、牛乳を販売する人たちが現れています。

練乳会社の設立を試みる

乳牛の飼育が盛んになる一方、余った牛乳の処理が問題になりました。練乳を製造してこの問題を解決しようと、牛乳販売の業者などが、明治三十二(一八九九)年に札幌煉乳合資会社を設立。資本金は四千円、所在地は北一条西三丁目、社長には藤田が就任します。同社は「熊印煉乳」という商標で製品を売り出し、当初は好評でした。しかし、製造技術の不備のため、時間がたつと、砂糖と牛乳が分離して変質したことから返品が相次ぎます。そのため、同社は設立三年後に解散しました。